

バラエティに富む川南らしい産物たち。 認定農業者、エコファーマーも続々。

「ウチの町の田んぼは広い」「見渡す限り畑だらけ」と、川南の住人なら一度は思ったことがある人も多いはず。開拓の町だけあって農用地の広さは他にひけをとらない。平成十一年のデータでは、田1千二百四十八ヘクタール、畑1千二百四十八ヘクタール(樹園地、牧草地含む)と、町の面積の四割近くを占め、遙かなる田園風景を裏づける。この大地を耕す農家は三千二百九十五世帯、就農人口は二千七百二十三人(販売農家)。いずれも平成十二年二月時点の数字であるが、これを農家一世帯当たりの経営耕地面積で見ると県下で第二位にランクされる。それだけ大規模農家



が多いということだ。農業粗生産額は約二百億円で、都城市、西都市に次いで第三位。農業は間違いなく川南町を支える基幹産業である。

どんな作物が獲れるのだろうか。「野菜から果樹まで、それこそ作れないものがないくらい種類が豊富。逆にいうとこの種類の多さが川南の特徴じゃないかな(JA尾鈴農産園芸部)。開拓時代の「食べられるものはなんでも作った」という精神が受け継がれ、「売れそうなものはなんでも作る」という気が概が、息づいているのかもしれない。

平成十二年の農業粗生産額をベースにみると、県内でベスト5に入っているのが、イチゴ、生茶、ニンジン(いずれも一位)のほか、荒茶(二位)、露地メロン(四位)の五品目。ほかにも、ミカン、カボチャ、キュウリ、トマト、パレイシヨなどの生産量が高く、コメも三千トン(平成十三年)ほど収穫している。

「尾鈴いちご」や「尾鈴茶」、カボチャの「鈴マロン」などは、すっかり名前が知られるようになってきた。ナショナルブランドも夢ではない。花き栽培はどうか。スイートピー、キク、スカシユリ、バラなどの生産額が高く、さらに新しい優良品種や共同育苗の整備を考える農家は多い。

しかしあらゆる業界がそうであるように、農業を取り巻く環境も厳しい。こんな時代に、地域を担う意欲あふれる農家が少しでも展開しやすいよう、町では農家の経営改善計画をバックアップする「認定農家制度」を実施している。認定農業者は三百四十二人(平成十四年十二月末現在)、県下市町村のなかでもかなり多いほうである。同じ様に、宮崎県からエコファーマーに認定されている農家



も多い。「安全・安心」は現代の外せないキーワードである。キュウリ、トマト、ミニトマト、ピーマン、メロン、ショウガの分野で合計四十三人(平成十四年十一月末現在)。平成十一年にできた「持続農業法」に基づく化学肥料や農薬の使用を減らした農家のことで、今後も力を入れて取り組んでいきたいとこだ。

